

関係の回復のために努めなさい

マタイによる福音書18:21-35

今日の福音書は、先週と同じようにキリスト教の共同体に関する言葉です。

初代教会の最も主な関心は、共同体にありました。当時は、神学、礼拝、賛美、説教、いろいろな教会の行事や企画などはありませんでした。ただイエスさまのお話を覚えている人々が集まって、一緒にパンとぶどう酒を飲みながら、イエスさまの話を分かち合ったのが、当時のキリスト教の集まりでした。このような集まりがキリスト教の中心だったので、共同体を守ることは、非常に大事でした。そして、初代教会の信徒たちは、イエスさまがすぐ来られるとっていました。新約聖書の何箇所には、イエスさまの再臨について書かれていて、キリスト教に対する迫害は、もっとイエスさまの再臨を期待させました。だから初代教会は、イエスさまが再び来られる日まで、自分たちの共同体を維持させたいと思いました。再臨を待ちながら、共同体を守って維持すること。これは教会の目標であり、最も大事に思っていたことでした。今、私たちが毎週行っている礼拝や説教、説教に込められた神学や牧師の服装、礼拝堂の飾りのようなものは、キリスト教がローマの国教になってから発達したものです。その前までのキリスト教の中心は、共同体性にあったと言っても過言ではありません。

今日の福音書21節で、ペトロはイエスさまにこのように尋ねます。

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」

ここでの兄弟は血縁関係の兄弟ではありません。自分以外の人を指すことでもありません。イエスさまの時代の弟子たちと初代教会のキリスト教の共同体を称する言葉です。つまり、共同体の中で、教会の中で、兄弟が自分に罪を犯したなら、何回まで赦したらいいのかという質問です。そして、この質問にペトロは7回まで許さなければならないのかと尋ねます。7回ということは、多くの機会を与えることを意味します。当時の一般的なラビたちは、3回まで許しなさいと教えました。だから、ペトロが言った7回の赦しは、当時の教えより寛大なことでした。しかし、イエスさまは7回の許しを言ったペトロに、より多くの許しをなさいと言われます。

「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい (22節)。」

七の七十倍までも赦しなさいという言葉は何でしょうか。

490回まで赦しなさいという言葉でしょうか。それとも、限りなく赦しなさいということでしょうか。イエスさまは兄弟に対しては、限りなく赦しなさいと言われました。そして天の国の赦しについてたとえられます。このたとえの中では、王とその王にお金を借りている家来が登場します。この家来は、王に一万タラントンの借金をしていました。一万タラントンというものは、約40kg程度の金貨を意味することでした。そして、当時の人々には最大の通貨であり、最高の数字の単位を意味します。ギリシャ語ではμυροισ (ムリオス) と言っていますが、この言葉からmyriad (無数だ) という英語の単語が出ました。つまり、一万タラントンを借りたというのは、到底返済することができないということです。主人は、返済ができないこの家来に自分のすべてを売って返済しなさいと言います。25節の御言葉です。

「主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。」

この主人の命令がひどいと思っている方々がいらっしゃるかもしれませんが、これらの主人の命令は、当時には慣習とも同じものでした。旧約聖書でも、いくつかの箇所には、自分のすべてを売って返済するようにさせたという記録があります。列王記二4章1節には、エリシャの弟子の妻一人がエリシャのところに来て、助けを求めます。

「あなたの僕であるわたしの夫が死んでしまいました。ご存じのようにあなたの僕は主を畏れ敬う人でした。」

ところが債権者が来てわたしの子供二人を連れ去り、奴隷にしようとしています。」

返済できない場合、家族を売ったり奴隷にしたりしたのは、当時の慣習であり、適切なものでした。一万タラントンを借りた家来も同じようになってしまふしかありませんでした。家来はひれ伏し、「どうか待ってください。きっと全部お返します」と主人に求めます。すると主人は憐れに思い、彼を赦し、彼の借金を帳消しにしてくれます。待つてくれるのではなく、帳消しにしてくれたということが、この本文が表したいことだったと思います。

ところが、この家来は出て行って、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会います。

そして仲間の首を絞め、「借金を返せ」と言います。仲間はひれ伏して、求めます。「どうか待ってくれ返すから。」しかし、この家来は承知せず、その仲間が借金を返すまでと牢に入れました。この事の次第を見た他の仲間たちは、牢に入れられた仲間を憐れに思い、主人のところに行って、起こったことを全部告げました。すると主人は、その家来を呼びつけてこう言います。32～33節の御言葉です。

「不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」

一万タラントンを帳消しにしてもらいましたが、せいぜい百デナリオンを帳消しにしてくれなかった家来の姿を見て、皆様は何を感じられていますか。赦しを受けたというのは、単に借金を帳消しにしてもらっただけにあるのではないと思います。目に見える数字的なものだけでなく、目に見えない他のすべてのものも赦されたのです。今日の福音書27節に「主人は憐れに思い、彼を許した」と書かれています。一万タラントンを帳消しにしてやる前に、主人はすでに家来を赦しました。そして赦しに対する対価として、借金を帳消ししてくれたのです。しかし、赦しを受けた家来は主人の心を分かっています。主人が自分についてどんな心を持っていたかを計れません。だから、自分に借金している仲間を許せなかったのです。

当時のユダヤ人たちは、神さまの心を思っていないでいました。

ただ自分たちに与えられた神さまの選択と救いだけを思っていました。律法を守ることも、自分たちに与えられた特権だと思いました。だから、律法を守れない者は、ユダヤ人であっても無視し、律法に関係なく、生きていた異邦人たちを軽蔑しました。一万タラントンの許しを受けた家来が百デナリオンの借金をしている仲間を赦さなかったように、彼らの心の中には、他の人に対する指摘と非難だけがありました。そして、このようなことは、初代教会の中でもありました。ユダヤ人が中心になった教会の中に、異邦人が入って来て始まりました。ユダヤ人ですが、自分の都合によって、神さまの言葉を守れない人も生じました。そして、そんな彼らが信仰をよく守っている真面目な人たちに、罪を犯したこともありました。このようなことによって、関係中心の初代教会は揺れ、共同体を守って維持することも難しくなっていました。

このような状況の中で教会が行うことができたことは、「神さまの赦し」を覚えることしかありませんでした。神さまが自分たちをどのくらい愛して下さったかを覚えること。そしてその愛をもって自分に罪を犯した教会の兄弟たちを許すことでした。返済できないものを帳消しにされたということを悟った人だけが、崩れた関係を回復させることができました。そしてそれによって関係中心の初代教会は、守られ、維持されることのできたのだと思います。神さまの赦しを覚えること。これは初代教会でのみ、必要なものではないと思います。今、私たち教会にも必要なものであり、今後からも必要なものになるでしょう。今の教会は初代教会のように関係中心だけの教会ではありませんが、でも、教会の交わりは、相変わらず信仰の中で大きな部分を占めているからです。先週の福音書は、兄弟の過ちを悟らせるために、最後まで機会を与えることについてのことでした。そして今日の福音書は、赦しのためのことです。この二つによって、お互いが交わり、信仰の関係を結ぶなら、私たちの教会は、丈夫な教会になっていきます。天の国の鍵を上手に使う教会になります。神さまの赦しを覚えて、限りなく赦すことを決心した皆様の上に、御恵みがありますように、主の御名によって祈ります。アーメン。